

慶應義塾長
慶應義塾体育会長
石川 忠雄



陸の王者慶應の百年

「陸の王者慶應」という言葉は、応援歌『若き血』の一節だが、いつの間にか慶應スポーツを象徴する最も端的な代名詞となって仕舞った。元来近代の学校教育のなかで、体育のもつ役割を高く認めたのは、他でもない福澤先生であった。それは「先ず獣身を成して後に人心を養え」との箴言に表現されている。ところで塾生の健全な身体の発育を目指して、慶應義塾が体育会を創設したのは、明治25年のことであった。従って平成4年の今年は、その時から数えて満100年に当たる。発足の当初は、剣道、柔道、野球、端艇、弓術、操練、徒歩の7部に過ぎなかったが、その後幾度かの消長を重ねて、今日では慶應義塾体育会への正式の加盟を認められている部は、総計38の多きに及んでいる。

この100年という歳月は、それぞれの青春を自らの好むスポーツに捧げた人にとって、忘れ得ないものとなっている。いうまでもないことだが、スポーツには個人と団体との、夫々の技とタイムの優劣を競うものにわかれる。よく栄冠涙ありといわれるが、勝負の背後には晴れの日を目指した不断の練習の蓄積がある。殊に学生スポーツの場合、個人の栄誉はもとよりだが、それ以上に自らの所属する大学の栄光と伝統とが、部員たちの双肩にかかっているのである。いわばその責任感を、自らの若き日に身をもって体得したことが、体育会の先輩諸君のその後の人間形成に、いかに多くの稔りを付け加えたかは、誰もが均しく認めるところであろう。

かつて小泉信三先生はスポーツの与える三つの宝と題して語ったことがある。

その第一は練習、または練習の体験——不可能を可能にするものは練習だという体験——を持つことである。第二の宝とは何か。それはフェアプレーの精神、言葉をかえていえば、Be a hard fighter and a good loser. でありたいことである。そして第三に挙げたいのは、スポーツを通じてわが生涯の友を得たこと、この三つこそスポーツの与えた宝だったと先生は述懐される。塾生時代、日本におけるテニスのすぐれたプレイヤーであった小泉先生にして、始めていという言葉ではないか。

顧みれば、慶應義塾体育会は、過去1世紀の間に、夫々のスポーツの歴史に残る数多くの偉大な名選手を生み育ててきた。来るべき次の100年においても、その名に恥じない体育会でありたいと願っている。